令和5年度

埋蔵文化財年報

2024

公益財団法人富山県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 課

序

当財団は令和５（2023）年度に富山県からの委託をうけ、３件の埋蔵文化財の発掘調査事業と遺物整理事業を行いました。

主要地方道富山魚津線道路橋りょう改築事業関連では、富山市水橋荒町・辻ヶ堂遺跡の発掘調査を実施し、中世の集落を確認しました。令和４（2022）年度の調査成果とあわせて遺物整理を実施し、報告書を刊行しました。

県営農地整備事業関連では、小長沢地区と浜黒崎地区で発掘調査を実施しました。小長沢地区では小長沢鎌蓋遺跡を調査し、古代以降の自然流路を検出しました。令和４年度に調査した下邑遺跡と小長沢Ⅱ遺跡とあわせて遺物整理を実施し、報告書を刊行しました。浜黒崎地区では浜黒崎町畑遺跡と浜黒崎悪地遺跡を調査し、古代～中世の集落を検出し、その成果を報告書にまとめました。

本書は、令和５年度に当財団が実施した事業の概要をとりまとめたものです。本書をとおして埋蔵文化財への理解がより深まれば幸いです。

事業の実施にあたりご協力賜りました関係各位に深く感謝申しあげるとともに、今後とも一層のご指導を賜りますようお願い申し上げます。

令和６年６月

公益財団法人富山県文化振興財団

埋蔵文化財調査課

目　次

Ⅰ　公益財団法人富山県文化振興財団概要 …… 1

1　名　称 …… 1　　2　所在地 …… 1

3　目　的 …… 1　　4　事　業 …… 1

5　沿　革 …… 1　　6　組　織 …… 1

Ⅱ　埋蔵文化財調査課概要 …… 2

1　名　称 …… 2　　2　所在地 …… 2

3　施設概要 …… 2　　4　組　織 …… 2

5　職　員 …… 2

Ⅲ　事業概要 …… 2

1　発掘調査事業 …… 2　　2　遺物整理事業 …… 2

3　刊行物 …… 2　　4　受贈図書 …… 3

5　普及事業 …… 3

Ⅳ　主な会議・研修 …… 3

Ⅴ　主な講演・指導等 …… 3

Ⅵ　調査概要 …… 4

1　令和５年度発掘調査 …… 4

2　主要地方道富山魚津線道路橋りょう改築事業関連遺跡発掘調査 …… 4

3　県営農地整備事業関連遺跡発掘調査 …… 9

Ⅶ　研究レポート …… 14

1　浜黒崎町畑遺跡、浜黒崎悪地遺跡と富山湾を望む縄文遺跡 …… 14

2　『水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告』補遺 …… 19

Ⅰ　公益財団法人富山県文化振興財団概要

１　名　　称　公益財団法人富山県文化振興財団

２　所 在 地　本部：富山市新総曲輪４番地 18 号（富山県民会館内）

３　目　　的　富山県民が多彩な芸術文化に親しむ機会を充実するとともに、次世代を担う子どもたち・青少年の健全な育成と生涯学習・学術調査に係る事業を通じてふるさと富山の文化や歴史を学ぶ機会を提供し、もって県民一人ひとりが身近な芸術文化活動や学習活動に参加するとともに、世界に誇ることのできる芸術文化の創造・発信に与することを目的とする。

４　事　　業　（１）文化施設の貸与、芸術文化事業の展開及び美術館・博物館施設の運営等を通じた芸術文化の推進

（２）生涯学習機関における講座の開設、学習相談、学習資料の収集及び表彰事業等を通じた県民の心身の健全な発展、豊かな人間性の涵養

（３）埋蔵文化財の調査、資料収集等を通じた学術の振興

（４）その他この法人の目的を達成するために必要な事業

５　沿　　革　昭和 55 年８月１日　財団法人富山県民会館と財団法人教育文化会館を統合して「財団法人富山県文化振興財団」を設立

平成　元年４月１日　富山県民会館に埋蔵文化財課を新設し、埋蔵文化財調査研究事業を開始

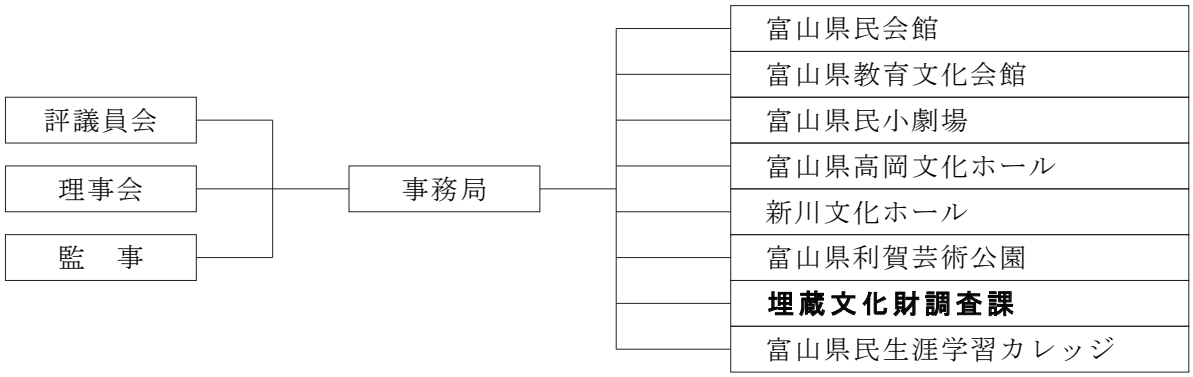
平成　４年４月１日　埋蔵文化財課から埋蔵文化財調査事務所へ改組

平成　７年４月１日　専任の所長及び副所長を置く事務所として独立

平成 24 年４月１日　公益財団法人へ移行し、「公益財団法人富山県文化振興財団」に名称変更

平成 30 年４月１日　「埋蔵文化財調査事務所」から「埋蔵文化財調査課」へ改組

６　組　　織



（平成 30 年４月１日改編）

Ⅱ　埋蔵文化財調査課概要

１　名　　称　公益財団法人富山県文化振興財団　埋蔵文化財調査課

２　所 在 地　〒930-0887　富山市五福 4384 番１号　TEL 076-442-4229　FAX 076-433-3797

３　施設概要　（１）敷地面積　1,565.649 ㎡

（２）建物規模　軽量鉄骨造２階建　延床面積　866.192 ㎡

４　組　　織

課　長	総務担当 主要地方道富山魚津線道路橋りょう改築事業関連発掘調査担当 県営農地整備事業関連発掘調査担当	副主幹 （３）

５　職　　員

課　　長	田中　道子	副 主 幹	島田　亮仁	副 主 幹	朝田亜紀子
副 主 幹	越前　慎子	副 主 幹	青山　晃	副 主 幹	町田　賢一
副 主 幹	金三津道子	副 主 幹	青山　裕子	副 主 幹	町田　尚美

Ⅲ　事業概要

１　発掘調査事業

事業名	事業委託者	遺跡名	所在地	調査面積（㎡）	受託期間
主要地方道富山魚津線道路橋りょう改築事業に伴う埋蔵文化財調査	富山県	水橋荒町・辻ケ堂遺跡	富山市 水橋辻ヶ堂地内	729	令和５年４月１日 ～ 令和６年３月 31 日
県営農地整備事業（小長沢地区）に伴う埋蔵文化財調査		小長沢鎌蓋遺跡	富山市婦中町 小長沢地内	56	令和５年６月 22 日 ～ 令和６年３月 22 日
県営農地整備事業（浜黒崎地区）に伴う埋蔵文化財調査		浜黒崎町畑遺跡	富山市 浜黒崎地内	384	令和５年４月 12 日 ～ 令和６年３月 22 日
		浜黒崎悪地遺跡		451	

２　遺物整理事業

事業名	事業委託者	遺跡名	所在地	現地調査年度	受託期間
主要地方道富山魚津線道路橋りょう改築事業に伴う埋蔵文化財調査	富山県	水橋荒町・辻ケ堂遺跡	富山市 水橋辻ヶ堂地内	令和４・５年度	令和５年４月１日 ～ 令和６年３月 31 日
県営農地整備事業（小長沢地区）に伴う埋蔵文化財調査		下邑遺跡	富山市婦中町 小長沢地内	令和４年度	令和５年６月 22 日 ～ 令和６年３月 22 日
		小長沢Ⅱ遺跡			
		小長沢鎌蓋遺跡		令和５年度	
県営農地整備事業（浜黒崎地区）に伴う埋蔵文化財調査		浜黒崎町畑遺跡 浜黒崎悪地遺跡	富山市 浜黒崎地内	令和５年度	令和５年４月 12 日 ～ 令和６年３月 22 日

３　刊行物

・富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第 80 集　下邑遺跡・小長沢Ⅱ遺跡・小長沢鎌蓋遺跡発掘調査報告

・富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第 81 集　浜黒崎町畑遺跡・浜黒崎悪地遺跡発掘調査報告

・富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第 82 集　水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告

・とやま発掘だより－令和５年度発掘調査速報－

・令和４年度　埋蔵文化財年報

４　受贈図書

令和５年４月１日から令和６年３月 31 日までの間の受贈図書は、合計 671 冊である。

５　普及事業

（１）浜黒崎町畑遺跡説明会

令和５（2023）年 10 月７日（土）午前 10 時から 12 時まで遺跡説明会を開催した。主に地元住民を対象とし、約 30 名の参加があった。調査職員が遺跡の全体説明後、参加者を誘導し、現地の遺構に近づいて解説を行った。また、簡易テントにおいては、今回の調査出土遺物と富山県埋蔵文化財センターから借用した試掘調査出土遺物の展示・解説を行った。

Ⅳ　主な会議・研修

期　間	会議名等	場　所	出席者
10 月 20 日	令和５年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会中部・北陸ブロック連絡会	石川県金沢市	田中　道子
11 月 27 日	令和５年度埋蔵文化財保護対策五県協議会	富山県富山市	越前　慎子

Ⅴ　主な講演・指導等

期　間	講演・調査の指導	場　所	講　師
６月 17 日	八戸市是川縄文館　令和５年度考古学講座	青森県八戸市	町田　賢一
９月 10 日	富山県埋蔵文化財センター　令和５年度県民考古学講座	富山県富山市	青山　晃
10 月 19・20 日 １月 25・26 日	秦野市柳川竹ノ上遺跡遺構整理の現地指導	神奈川県海老名市	町田　賢一

Ⅵ　調査概要

１　令和５年度発掘調査

今年度は富山県土木部から主要地方道富山魚津線道路橋りょう改築事業に伴い富山市水橋辻ヶ堂地内に所在する水橋荒町・辻ヶ堂遺跡、農林水産部から県営農地整備事業に伴い富山市浜黒崎地内に所在する浜黒崎町畑遺跡・浜黒崎悪地遺跡と富山市婦中町小長沢地内に所在する小長沢鎌蓋遺跡について発掘調査の委託を受けて本調査を実施した。

２　主要地方道富山魚津線道路橋りょう改築事業関連遺跡発掘調査

水橋荒町（みずはしあらまち）・辻ヶ堂（つじがどう）遺跡

（１）調査の経緯

①位置と環境

遺跡は富山市北部の常願寺川右岸の河口付近に位置し、遺跡範囲は南北 1200 m、東西 500 mの範囲

水橋荒町・辻ヶ堂遺跡位置図（１：25,000）

に及ぶ。今回の調査区は富山湾海浜部に形成された砂丘上に立地し、現況で標高約２ｍとなる。現在の常願寺川河道は明治 26 年（1983 年）に完成した河川改修によるもので、それ以前は遺跡よりも上流側で河道は蛇行し白岩川へ合流していた。

周辺遺跡では浜黒崎野田・平榎遺跡が縄文時代前期からの遺跡として知られているのが古く、その後は当遺跡を含む複数の遺跡が縄文時代中期～晩期に存在する。弥生時代には滑川市の魚躬遺跡が当遺跡と同様に海浜部近くに位置し、弥生時代中期～終末期の遺跡とされている。また、当遺跡でも過去の調査により弥生時代後期の溝や柱穴等が確認され、集落の存在が推測されている。奈良・平安時代では当遺跡で掘立柱建物や道路跡等が確認され、古代北陸道に整備された「水橋駅」の推定地とされる。中世には小出城跡等の城館が存在し、当該期の集落が展開していたとみられる。近世においては遺跡の所在する西水橋地区は漁業・海運により発展し、近世北陸道も通る交通の要衝でもあった。

②調査の経過

主要地方道富山魚津線の常願寺川に架かる現在の今川橋は老朽化に伴い上流側に新たな橋の架け替え工事が進められている。これに伴い常願寺川右岸側の道路も移動することとなり、埋蔵文化財包蔵地内であることから試掘調査が実施された。試掘調査は富山県教育委員会が令和３・４年に実施し、1,841 ㎡の本調査が必要と判断され、富山県教育委員会の「埋蔵文化財の本発掘調査における対応方針」（平成 23 年 11 月 28 日）に基づき、財団が令和４年度にＡ地区（1,112 ㎡）、令和５年度に残るＢ地区（729 ㎡）の調査を受託することとなった。

遺跡名（略号）	地区	調査期間	調査面積（㎡）	検出遺構	出土遺物	担当者
水橋荒町・辻ヶ堂遺跡（01ＭＡＴ）	Ｂ	５月 22 日～８月２日	729	掘立柱建物・土坑・溝	縄文土器・弥生土器・瓦質土器・越中瀬戸・伊万里・唐津・近代陶磁器・石製品	越前　慎子 青山　晃

（２）本調査

調査区は遺跡範囲の北西に位置し、現況は宅地で標高は 1.7 ～ 2.0 ｍを測る。基本層序はⅠ層：黒褐色砂質土（表土）、Ⅱ層：褐色砂質土～黄褐色砂（地山・遺構検出面）となる。Ⅰ層は地表から１ｍ程の堆積があり、調査区中央部から東部では宅地造成により砕石等を含む攪乱層が広がっている。遺構検出面の標高は 1.0 ～ 1.2 ｍであった。検出遺構は掘立柱建物２棟、溝 36 条、土坑 48 基で、遺構の時期は弥生時代、中世、近世に大別される。

弥生時代では溝・土坑が検出された。この内、ＳＤ 109 は令和４年度調査のＡ地区で検出された方形周溝墓と溝の長軸方向が類似しており、方形周溝墓の周溝となる可能性がある。その場合、ＳＤ 109 の北東に隣接するＳＫ 106 が周溝の南端部と考えることもできる。当該期の遺物は全体に少なく、集落からは距離を置いた墓域、あるいはその縁辺部であったと考えられる。

中世では掘立柱建物２棟を検出した。ＳＢ１は２×１間、ＳＢ２は１×１間の側柱建物となる。ともに柱間距離が３ｍを超し、柱穴は径 0.5 ～ 0.7 ｍと比較的大きい。柱穴からの出土遺物は縄文土器や弥生土器が混入するのみで時期の比定が難しいが、構造の特徴から中世後半と推定した。また、ＳＤ 117 はＳＢ２の西側に平行するようにあり、建物群に付随する区画溝であった可能性がある。

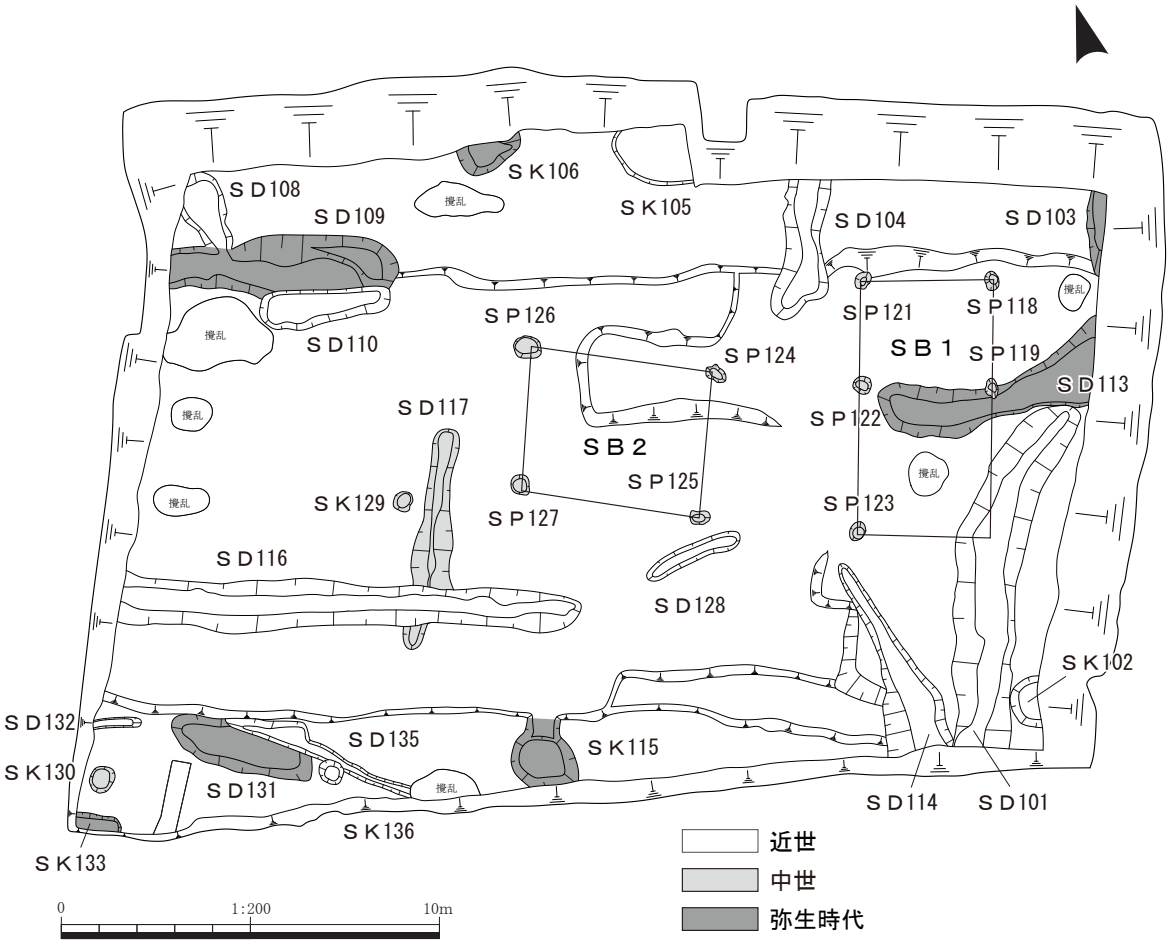
近世では溝・土坑が検出されている。ＳＤ 116 は直線的に伸びる区画溝で、礫が多く含まれた埋土で人為的に埋め戻されている。また、ＳＫ 102 からは幕末～明治期にかけての磁器が出土しており、

調査区では近世から近代にかけて土地利用されていたと考えられる。しかし、宅地造成による攪乱範囲が広いため、その様相は十分に把握することはできなかった。

なお、遺構埋土への混入としてではあるが縄文土器の出土が多くあった。縄文時代中期後葉（串田新式）から後期前葉（気屋式）のものであり、特に前者については海岸部付近での出土はこれまでほとんど知られておらず、低地部への進出を考える上で貴重な事例となる。出土遺物には石錘もあり、海岸部付近での漁撈などの活動場所として利用されていたと考えられる。（青山　晃）

縄文土器

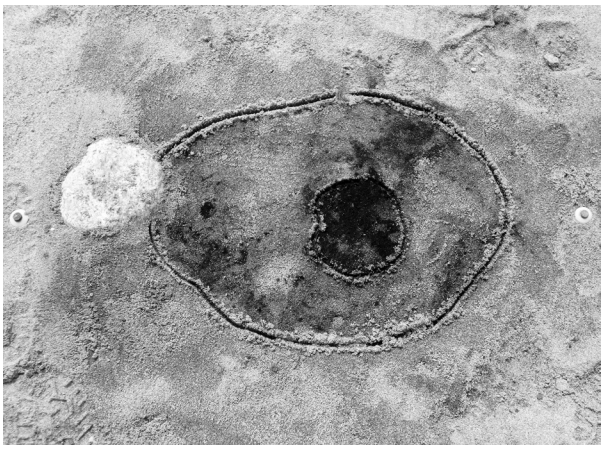
縄文土器



※遺構番号は調査時の番号に100を加算し、令和６年３月刊行の発掘調査報告書記載に合わせたもの

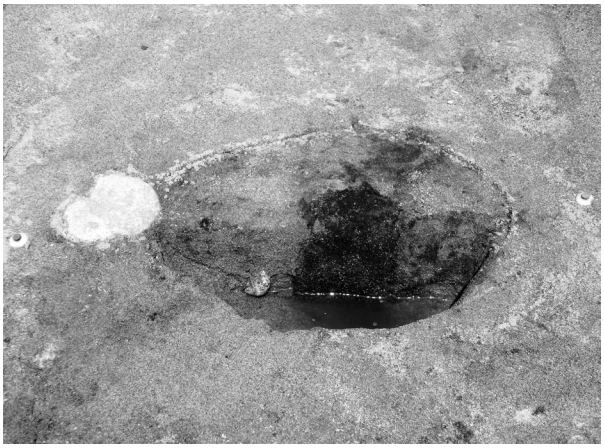
水橋荒町・辻ヶ堂遺跡全体図（１：200）

ＳＢ２（北から）



ＳＰ118 検出状況（東から）

作業風景（南から）



ＳＰ118 断面（東から）

全景（南東から）

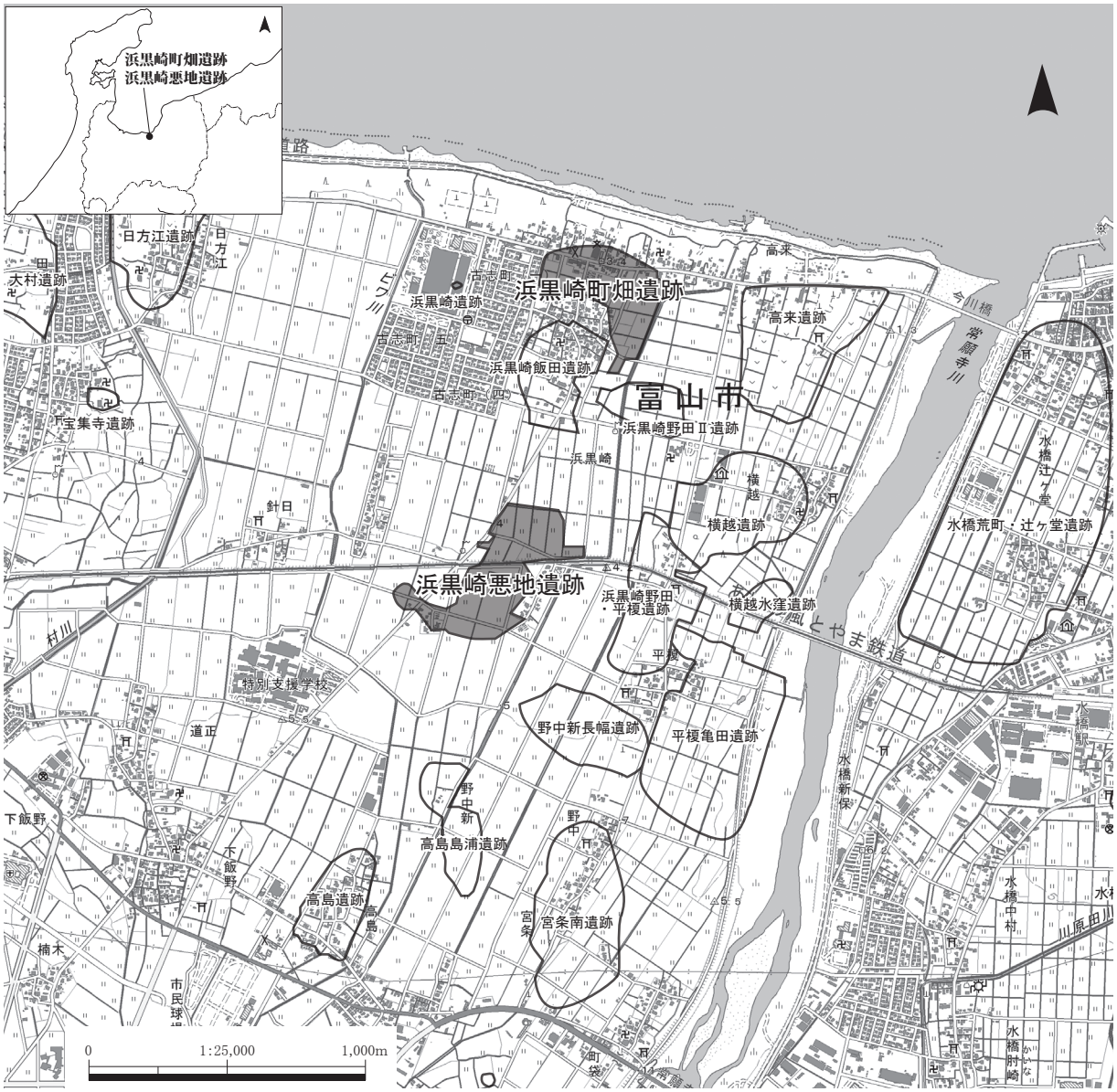
３　県営農地整備事業関連遺跡発掘調査

浜黒崎町畑遺跡（はまくろさきまちはた）・浜黒崎悪地遺跡（はまくろさきあくち）

（１）調査の経緯

①位置と環境

浜黒崎町畑遺跡と浜黒崎悪地遺跡は富山市中央北部で、西を神通川、東を常願寺川にはさまれた海岸近くの浜黒崎地区に所在する。現況は農道もしくは水田で、標高は浜黒崎町畑遺跡で2.3ｍ前後、浜黒崎悪地遺跡で4.2ｍとなっている。周辺の遺跡は縄文時代からあり、浜黒崎野田・平榎遺跡など主に後晩期を主体としているが、建物などはみつかっていない。弥生時代では沖積地で水田耕作に向いている地形のためか中期から遺跡がみられる。後期には水橋荒町・辻ヶ堂遺跡で方形周溝墓が複数造営されるなど海岸沿いに遺構がみつかる。奈良・平安時代においては水田開発が進んだためか水橋荒町・辻ヶ堂遺跡など各所で建物を検出した遺跡がみられるようになる。中世では婦負郡との境目に近いことから平榎亀田遺跡などで城館が築かれている。近世になると、水田とともに海岸沿いに浜街道が整備され、街道沿いの集落として発展し、現況と変わらない光景となっていたようである。



浜黒崎町畑遺跡・浜黒崎悪地遺跡位置図（１：25，000）

②調査の経過

富山市浜黒崎地区では県営農地整備事業が計画され、富山県埋蔵文化財センターでは事業内に複数の遺跡が含まれていることから、令和元（2019）年～令和４（2022）年にかけて試掘調査を実施した。この結果をうけ、富山市教育委員会が令和４（2022）年に遺跡範囲の変更を行った。当財団では、事業実施において排水路部分など遺跡に影響がある部分について、富山県農林水産部から本発掘調査を受託することとなった。調査対象地は浜黒崎町畑遺跡で３地区、浜黒崎悪地遺跡で４地区である。

遺跡名（略号）	地区	調査期間	調査面積（㎡）	検出遺構	出土遺物	担当者
浜黒崎町畑遺跡（01HM）	A・B・C	5月22日～10月23日	384	掘立柱建物・溝・井戸・土坑・柱穴・ピット・噴砂	縄文土器･弥生土器・土師器･須恵器･中世土師器･珠洲･瀬戸美濃・青磁・土師質土器･越中瀬戸･肥前系陶磁器･不明陶磁器・土製品	田中　道子 町田　賢一
浜黒崎悪地遺跡（01HA）	A・B・C・D	6月5日～11月21日	451	溝・土坑・柱穴・ピット・自然流路・谷	縄文土器･弥生土器・土師器･須恵器･中世土師器･白磁・越中瀬戸･肥前系陶磁器	

（２）浜黒崎町畑遺跡

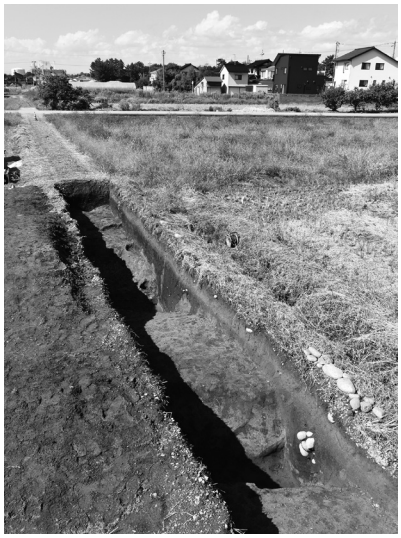
調査区は遺跡南側のＡ地区、遺跡北側のＢ・Ｃ地区の３地区からなる。Ａ地区の現況は水田で、基本層序はⅠ層が表土（にぶい黄褐色シルト）、Ⅱ層が盛土（明黄褐色シルトなど）、Ⅲ層が遺物包含層（灰黄褐色シルト）、Ⅳ層が地山で遺構検出面（にぶい黄褐色砂質シルト）となっている。遺構は溝９条と土坑２基があるが、掘立柱建物や柱穴など居住を示す遺構はない。当地区は遺跡範囲の南端にあたり、集落の縁辺部なのだろう。遺構の時期は、溝から珠洲が出土しており、おおむね中世とみられる。このほかにⅣ層下のⅤ層（褐色粗砂）を噴き上げる噴砂が１条検出された。層位や文献から安政飛越地震（1858 年）によるものと考えられる。浜黒崎地区でははじめての噴砂検出となる。

Ｂ・Ｃ地区の現況はそれぞれ農道・水田で、基本層序はⅠ層が表土（灰黄褐色砂質シルト）、Ⅱ層が盛土（にぶい明黄褐色砂質シルトなど）、Ⅲ層が遺物包含層（黒褐色シルト）、Ⅳ層が整地層（灰黄褐色砂質シルトなど）、Ⅴ層が地山で遺構検出面（明黄褐色砂質シルト）である。なお、海岸に近いＣ地区にはⅣ層はなく、土質も砂質がちとなっている。遺構には掘立柱建物４棟、溝 10 条、井戸１基、土坑 11 基、柱穴・ピット 22 基がある。掘立柱建物は狭小な調査区のため、全容は不明だが柱穴の並びから総柱式と想定したい。Ｂ地区に３棟、Ｃ地区に１棟ある。井戸は素掘りの１基だが建物近くにあり、付随施設なのだろう。この建物の軸にあうように断面逆台形の溝が約３ｍ離れて２条走っている。また、北側ではこれに直交するように同様な溝が走っていることから集落を区画するような溝の可能性が高い。埋土土壌の珪藻分析からは、常時流水のある水路であった可能性は低い。遺構の時期は、溝から出土した遺物から 12 世紀中～後葉とみられ、中世前半期の集落であったのだろう。

遺物は、３地区で縄文土器５、弥生土器１、土師器 69、須恵器 18、中世土師器皿７、珠洲７、瀬戸美濃３、青磁３、土師質土器１、越中瀬戸 13、肥前系陶磁器 12、不明陶磁器 18、炉壁３、土錘２が出土している。遺物量は少なく、いずれも破片で完形はない。土錘２点はいずれも溝から出土しており近隣での網漁が想定される。縄文土器のうち１点は、Ｃ地区の地山から出土している前期後半の蜆ヶ森Ⅱ式で縄文海進期にあっても潟湖化していたことを示す貴重な遺物である。

浜黒崎町畑遺跡遠景（南から）

Ａ地区南側（西から）



Ｂ地区西側（東から）

Ｃ地区北側（北から）

Ａ地区噴砂（南から）

土器・土製品

（３）浜黒崎悪地遺跡

調査区は遺跡東側のＡ・Ｂ地区、遺跡西側のＣ・Ｄ地区の４地区からなる。Ａ・Ｂ地区の現況は水田で、基本層序はⅠ層が表土（灰黄褐色シルト）、Ⅱ層が盛土（暗オリーブ褐色シルトなど）、Ⅲ層が地山で遺構検出面（黄褐色砂質シルト）となっている。遺物包含層はない。遺構は溝５条、柱穴・ピット３基、自然流路・谷３があるが、掘立柱建物や柱穴など居住を示す遺構はない。当地区は遺跡範囲の北東端にあたり、集落の縁辺部なのだろう。自然流路はかつての常願寺川支流とみられ、流路の間の微高地状の平坦部に遺構が形成されている。遺構の時期は、溝から古墳時代の土師器が出土し、Ｂ地区自然流路埋土土壌の年代測定からも古墳時代以降に形成されたものと考えられる。

Ｃ・Ｄ地区の現況は水田で、基本層序はⅠ層が表土（灰黄褐色シルト）、Ⅱ層が盛土（にぶい黄褐色シルトなど）、Ⅲ層が遺物包含層（黒褐色シルトなど）、Ⅳ層が地山で遺構検出面（黄褐色砂質シルト）である。遺構には溝９条、土坑６基、柱穴・ピット 17 基がある。柱穴・ピットは集中して複数あるが、狭小な調査区のためか並ばない。ただし、あいの風とやま鉄道をはさんで南側の富山市教育委員会が調査した地区からは弥生時代から中世にかけて複数の掘立柱建物がみつかっており、これに続く可能性はある。溝も複数みつかっているが、調査区内でつながりが見えないため、その用途を特定することができない。ただし、Ｃ地区の断面逆台形の溝からは、土師器や中世土師器など複数の遺物がみつかっており、中心的な遺構とみられる。この溝の南側に柱穴・ピットがまとまっていることから区画溝かもしれない。遺構の時期は、出土遺物から古代から中世が中心と考える。

遺物は、４地区で縄文土器２、弥生土器４、土師器 79、須恵器５、中世土師器皿１、白磁１、越中瀬戸３、肥前系陶磁器２点が出土している。遺物量は少なく、いずれも破片。弥生土器は後期の高杯で、遺構からの出土ではなく、破片であるが、摩滅がなく遺存状態は良好である。南側の富山市教育委員会調査区で弥生時代の遺構が複数みつかっていることから、その延長なのだろう。　（町田賢一）

Ａ地区全景（西から）

Ｂ地区全景（西から）

Ｃ地区断面逆台形の溝（西から）

Ｄ地区全景（北から）

小長沢鎌蓋遺跡（こながさわかまぶた）

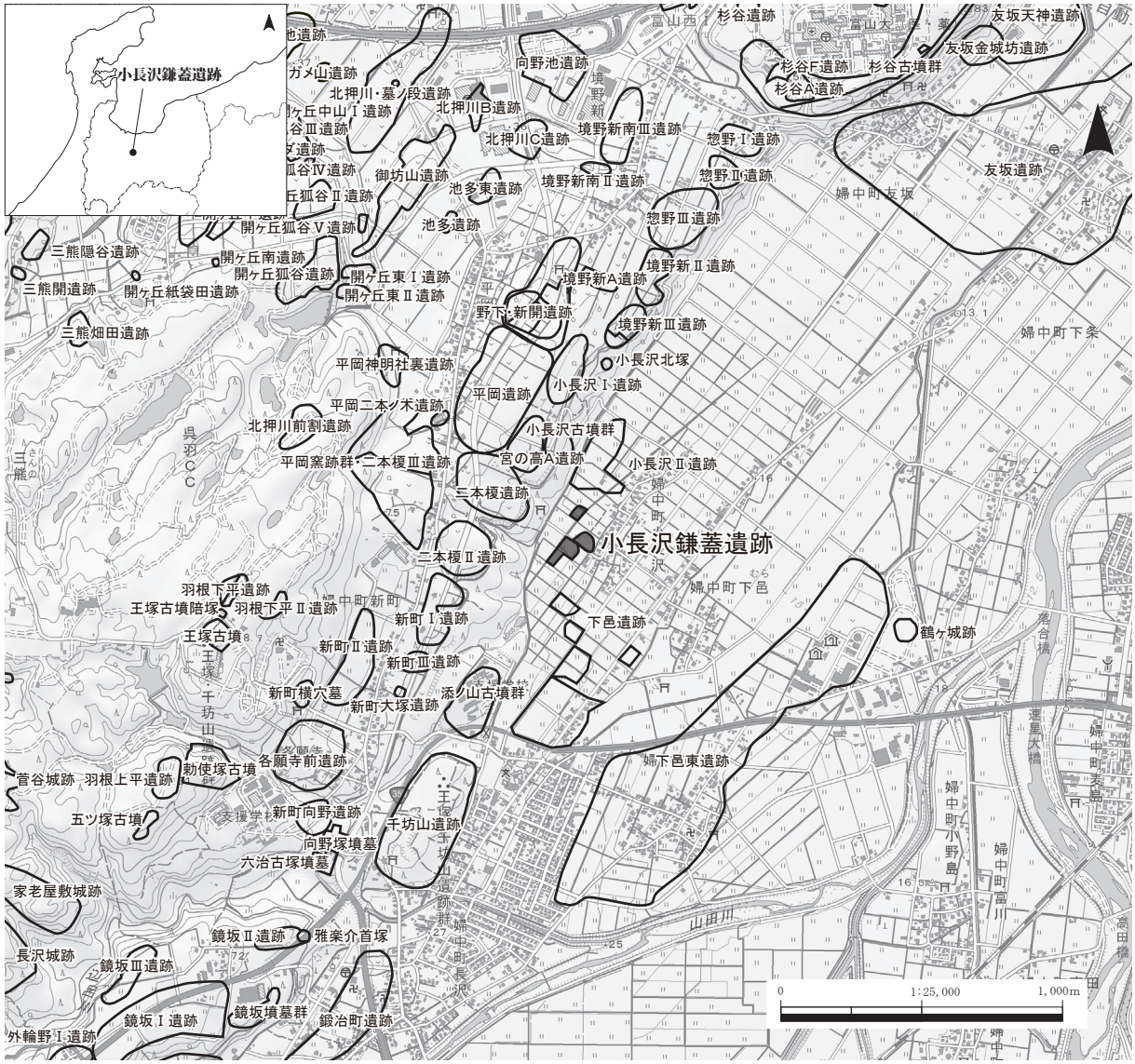
（1）調査の経緯

①位置と環境

小長沢鎌蓋遺跡は、富山市婦中町小長沢字鎌蓋に所在し、呉羽丘陵より続く羽根丘陵と山田川にはさまれた扇状地に立地している。標高は現況で約 18 m。周辺の遺跡では呉羽丘陵から羽根丘陵にかけて旧石器時代～近世に至る多くの遺跡が分布し、県内でも有数の遺跡密集地域となっている。縄文時代では平岡遺跡で県内最古の環状集落が形成されている。弥生時代終末から古墳時代前期にかけては国指定史跡となっている王塚・千坊山遺跡群があり、当該期においては県内で中心的な地域となっている。古代では丘陵部に窯跡や製鉄炉など生産遺跡、平野部では集落が形成される。中世になると丘陵部と平野部問わず城館が形成されるものの、平野部の多くは水田地帯が広がっていたようである。

②調査の経過

富山市婦中町小長沢地区では平成 29 年から県営農地整備事業が行われ、富山市教育委員会が平成 30（2018）年から令和 3（2021）年まで大規模な試掘調査を行った。その結果、対象地にある下邑遺跡、小長沢Ⅱ遺跡、小長沢鎌蓋遺跡の 3 遺跡の遺跡範囲が変更された。当財団ではこのうち本調査必要か所について昨年度から調査を行い、今年度は水路部分を対象に小長沢鎌蓋遺跡の調査を行った。



小長沢鎌蓋遺跡位置図（1：25,000）

（２）本調査

遺跡名 （略号）	調査期間	調査面積 （㎡）	検出遺構	出土遺物	担当者
小長沢鎌蓋遺跡 （01ＫＳＫ）	７月 24 日 ～ ８月１日	56	自然流路	土師器・越中瀬戸・肥前系陶磁器	田中　道子 町田　賢一

遺跡のある小長沢地区では昭和 31（1956）～ 34（1959）年に区画整理が行われ、水田とともに宮下排水路が整備された。今回の調査はこの宮下排水路の付け替え部分にあたり、幅約 2.4 m、長さ約 22.8 mのトレンチ状の細長い調査区である。調査前の標高は 18 mで、水田となっていた。

調査区の東側は、昭和 30 年代の宮下排水路掘削時の攪乱をうけていた。基本層序は、Ⅰ～Ⅴ層までである。Ⅰ層は現表土で、稲株の入る灰黄褐色シルト。Ⅱ層は現水田の床土で、オリーブ黒色シルト。Ⅲ～Ⅴ層は地山。遺物包含層はなかった。Ⅲ層は灰色砂質シルト、Ⅳ層は灰色粘質土、Ⅴ層はオリーブ灰色粘質土である。Ⅲ層の下にⅣ層、Ⅴ層となっているが、Ⅲ・Ⅳ層は調査区の南側のみにあり、北側はⅡ層下にⅤ層となっていて、遺構検出はⅤ層で行った。遺構は、自然流路１条のみである。

自然流路は北西－南東方向の流路で、南側の肩部のみの検出であることから全容は不明だが、南側の山田川から平野部に向かって流れていたものと考えられる。深さは検出面から最も深いところで１mに達する。埋土は上・中・下の大きく５層にわけられ、下層は２条みられることから、はじめは２条の流れがあり、その後堆積して１条となったようだ。流路から遺物は出土しておらず、時期比定は難しかったが、埋土の年代測定から下層の年代が 10 世紀を中心とする値を示しており、平安時代に下層が堆積したことが想定される。また、土壌の花粉分析から湿地性の環境が復元され、遺跡周辺では集落というよりも水田などの生産地が広がっていたものとみられる。小長沢の地名の由来が長沢川（山田川）の河原と言われていて、これを示すような遺跡であったのだろう。

遺物は表土から土師器、越中瀬戸、肥前系陶磁器が出土しているが、いずれも原位置とは言えず、小片が多く、表面や割口は摩耗が著しい。（町田賢一）

小長沢鎌蓋遺跡全景（南から）

調査区（上から）

Ⅶ　研究レポート

１　浜黒崎町畑遺跡、浜黒崎悪地遺跡と富山湾を望む縄文遺跡

町田　賢一

はじめに

令和５（2023）年に調査した富山市浜黒崎町畑遺跡と浜黒崎悪地遺跡では、いくつかの縄文土器がみつかった（町田 2024）。このなかには、これまで知られていた後晩期の土器のほかに、前期後葉の土器も１点含まれていた。海岸線近くの遺跡では、異例の古さの土器である。本稿では、浜黒崎町畑遺跡と浜黒崎悪地遺跡出土土器から、富山湾を望む縄文遺跡について考えてみたい。

１　周辺の低地縄文遺跡

浜黒崎町畑遺跡の近辺にあたる富山平野～射水平野東部においては、富山湾沿岸域（水橋荒町・辻ヶ堂遺跡や岩瀬天神遺跡など）、常願寺川河口域（浜黒崎町畑遺跡や浜黒崎野田・平榎遺跡など）、豊丘近辺（豊田大塚・中吉原遺跡や豊田遺跡など）、神通川河口域（四方荒屋遺跡や百塚遺跡など）、呉羽丘陵近辺（八町Ⅱ遺跡や小竹貝塚など）などにまとまって縄文遺跡がある。

富山平野や射水平野は、その多くが水田で、古くから土地改良やほ場整備が行われ、元の地形がわかりにくくなっている。このため、古い時期の地形がわかるものとして、国土地理院（旧大日本帝国陸地測量部）による明治 43 年測図の二万五千分一地形図（東岩瀬・滑川・富山・上市）がある。これに遺跡地図（「インフォマップとやま」）をあわせて、遺跡の立地を考えてみる（第１図）。

等高線をもとにみてみると、標高５ｍ未満の遺跡では、神通川より東側に水橋荒町・辻ヶ堂遺跡、浜黒崎町畑遺跡、浜黒崎悪地遺跡、岩瀬天神遺跡、千原崎遺跡などがある。これらは後期中葉～晩期を主体とする。浜黒崎町畑遺跡では、標高 1.6 ｍの砂層内から前期後葉の蜆ヶ森Ⅱ式土器がみつかっている（町田 2024）。このほかに前期土器の出土はない。中期になると水橋荒町・辻ヶ堂遺跡で、標高約１ｍの遺構検出面上から中期後葉の串田新式土器が複数出土している（青山 2024）。なお、岩瀬天神遺跡でも串田新式土器が出土しているとされる（古川 2002）が、図示はない。また、千原崎遺跡も遺跡地図では中期からとなっているが、それを示す土器は公表されていない。後期では、前葉の気屋式が水橋荒町・辻ヶ堂遺跡でみつかっている（野垣 2005・青山 2024）以外は酒見式期～八日市新保式期など中葉～末葉の土器が出土する遺跡となっている。

神通川より西側では、前期の貝塚である小竹貝塚と蜆ヶ森貝塚がある。小竹貝塚では前期中葉から貝層がつくられ､末葉まで続く（町田編 2014）。最も低い遺構検出面で 0.1 ｍ､最も高い遺構検出面で 2.5 ｍとなり、低い部分に板敷遺構、その上に貝層が堆積する。前期後葉の貝層内には多数の人骨が埋葬されていた。高い部分では竪穴建物がつくられるなど、地形を利用した集落構造となっている。この二つの貝塚は、ヤマトシジミが大量に捕獲できた潟湖に面した立地を示す。打出遺跡では、中世の溝から晩期末葉の土器が複数出土している（古川他 2004）。このほかに、土地改良時に利波遺跡で中期の土器が出土していたという（岡崎 1966）。

標高 7.5 ｍ未満の遺跡では、浜黒崎野田・平榎遺跡や高島島浦遺跡などがある。浜黒崎野田・平榎遺跡は遺跡地図では前期からの遺跡となっているが、前期や中期の遺物は図示されておらず、不明。

第１図　浜黒崎町畑遺跡、浜黒崎悪地遺跡とその周辺の縄文遺跡（１：50,000）
※国土地理院（明治 43 年測図）『二万五千分一地形図　東岩瀬・滑川・富山・上市』から作成

第１表　浜黒崎町畑遺跡・浜黒崎悪地遺跡周辺の縄文遺跡

遺跡標高	遺跡名	所在地	早期	前期	中期	後期	晩期	遺構検出面（最低）	文献
５ｍ未満	水橋荒町・辻ヶ堂	富山市水橋荒町			●	●	●	1.0ｍ	野垣 2005、青山 2024
	浜黒崎町畑	富山市浜黒崎		●		●	○	2.0ｍ	田中編 2022、町田 2024
	高来	富山市高来					○	―	―
	浜黒崎野田Ⅱ	富山市浜黒崎				●	●	2.1ｍ	田中編 2022
	横越	富山市横越					●	3.1ｍ	常深 2021
	横越水窪	富山市横越					●	3.7ｍ	田中編 2018
	浜黒崎悪地	富山市浜黒崎				●	●	3.8ｍ	小林他 1994・1995、町田 2024
	日方江	富山市日方江				○	○	―	古川 1989
	岩瀬天神	富山市岩瀬古志町				●	●	3.4ｍ	古川編 2002
	千原崎	富山市千原崎			○	○	○	2.2ｍ	古川 1999、鹿島他 2001
	四方荒屋	富山市四方荒屋				○	○	2.0ｍ	古川他 2000
	打出	富山市打出					●	2.0ｍ	古川他 2004
	利波	富山市利波			●	○	○	―	岡崎 1966
	八町西Ａ	富山市八町西					○	―	―
	今市	富山市今市			○	●	●	5.4ｍ	鹿島他 2013
	呉羽野田	富山市呉羽野田				○	○	―	―
	淀島	富山市北代中部		○				―	―
	蜆ヶ森貝塚	富山市呉羽町北		★				―	富山大学 1954
	小竹貝塚	富山市呉羽町北		★	○	●		0.2ｍ	町田編 2014
7.5ｍ未満	浜黒崎野田・平榎	富山市浜黒崎		○	○	●	●	4.0ｍ	田中編 2018
	野中新長幅	富山市野中				○		5.6ｍ	鹿島 1996
	平榎亀田	富山市平榎				●	●	3.9ｍ	田中編 2018
	高島島浦	富山市高島				●		5.4ｍ	鹿島 1996、小林 1997・1998
	高島	富山市高島				○	○	5.9ｍ	泉田 2020
	宮条南	富山市宮条				○	○	5.8ｍ	小林 1997
	森	富山市森					○	―	―
	八ケ山Ａ	富山市八ケ山				○	○	―	―
	百塚住吉Ｄ	富山市宮尾				○	○	7.6ｍ	鹿島他 2012
	八町Ⅱ	富山市八町南					★	5.2ｍ	鹿島編 2008
10ｍ未満	金尾新	富山市水橋金尾新					○	―	―
	中野	富山市水橋的場				○	○	―	―
	針原中町Ⅰ	富山市針原中町				●		5.0ｍ	小林 1998
	針原中町Ⅱ	富山市針原中町					○	6.4ｍ	小林 2000
	宮町	富山市宮町			○	○	○	7.3ｍ	細辻他 2007
	米田南田	富山市米田町					●	7.7ｍ	細辻他 2019
	豊田大塚・中吉原	富山市豊田本町				●	●	7.3ｍ	堀内他 2013
	豊田	富山市豊田町					★	―	藤田 1974
	豊丘町	富山市高園町					○	―	―
	八ケ山Ｃ	富山市八ケ山			○			―	―
10ｍ以上	水橋二杉	富山市水橋二杉				○	★	10.2ｍ	堀沢他 1997
	新堀	富山市水橋新堀					○	―	細辻 2007
	百塚住吉	富山市宮尾					●	10.0ｍ	小黒編 2009
	百塚	富山市松木		●		●	●	15.1ｍ	鹿島編 2012
	八ケ山	富山市百塚			○		○	―	―
	長岡八町	富山市北代新				●	●	16.0ｍ	藤田他 2003
	北代加茂下Ⅰ	富山市北代新			○			―	－
	北代加茂下Ⅲ	富山市北代			★	○	○	10ｍ	古川 2004
	八町Ｃ	富山市八ケ山			○			―	―
	長岡杉林	富山市長岡	●		●	★	●	21.4ｍ	久々他 1987
	北代	富山市北代			★	●	●	15.9ｍ	古川編 1999
	北代村巻Ⅴ	富山市北代			★			14.1ｍ	野垣 2014
	呉羽富田町	富山市北代新			●		●	―	藤田 1978
	呉羽小竹堤	富山市呉羽町			○	○	○	―	古川 1989
	北代中尾	富山市北代			○			―	―
	呉羽坊ヶ口	富山市呉羽町		○				―	―
	茶屋町	富山市北代				●		18.4ｍ	堀沢他 2003
	北代西山	富山市北代		●	●	●	●	13.9ｍ	井伊他 2000
	茶屋町西山	富山市茶屋町		○		★	●	19.4ｍ	古川他 2001
	茶屋町新長割Ⅰ	富山市茶屋町			○			―	―
	呉羽モグラ池	富山市呉羽町			★		●	27.1ｍ	小林 2016
	茶屋町峠山ノ下	富山市茶屋町				○	○	―	―

※　○は富山市遺跡地図にある遺跡の時期。●は報告書等で確認した土器の時期。★は遺構あり。

発掘調査では、後期中葉～晩期中葉の土器が流路から出土している（田中編 2018）。高島島浦遺跡では、後期中葉～後葉の土器捨て場がある（小林 1998）。八町Ⅱ遺跡では、晩期中葉～末葉の土器が土坑からみつかっている（鹿島編 2008）。

標高 10 m未満の遺跡では、針原中町Ⅰ遺跡で後期中葉の土器が出土している（小林 1998）。豊田大塚・中吉原遺跡では後期中葉～晩期前葉までの土器が複数出土している（堀内他 2018）。豊田遺跡では、土坑（報告書ではピット）から晩期中葉～末葉の土器が出土している（藤田 1974）。宮町遺跡は中期～晩期の遺跡とされるが、図示された遺物はない。

このように蜆ヶ森貝塚や小竹貝塚を除けば、標高 10 m未満では後晩期の遺跡が目立つ。後期末葉～晩期初頭の標式（岩瀬天神式）遺跡ともなっていた岩瀬天神遺跡は、海岸線直近にある。後期や晩期の土器は土坑内から出土しているが、中世の遺構と考えられ、二次堆積と報告している（古川 2002）。水橋荒町・辻ヶ堂遺跡でも、串田新式や気屋式土器は別の時期の遺構から出土している（青山 2024）。けれども、これらの土器は、摩滅がほとんどなく、遠方からの移動は考えにくい。その場所ではないにしても、近辺に集落があったことは間違いないのだろう。このように浜黒崎町畑遺跡と浜黒崎悪地遺跡の近隣では、標高 10 m未満であっても、遅くとも後晩期にあっては集落がつくられていた可能性が高い。なお、10 m以上の遺跡では、各時期の遺構・遺物がみつかっている。

２　地質からみた低地縄文遺跡

次に地質からみてみよう。藤井昭二は、富山湾の海水面は縄文前期で＋６ｍ、後期で－２ｍとし、地盤沈下も加味して、後期は現在の－５ｍ付近に海岸線を想定している（藤井 1964）。前期の遺跡は、温暖化で縄文海進に伴い台地や砂丘につくられたが、後期になると、寒冷化で海退に伴い広がった砂丘や自然堤防上につくられるようになったとする。川崎一朗は、海水準について 6,000 年前が＋ 2.5 m、5,000 年前が＋ 1.5 m、4,000 年前が＋ 0.5 m、3,000 年前が－ 0.5 mと仮定し、定常的沈降と地震性地殻変動から低地の縄文遺跡立地を考えている（川崎 2021）。

卜部厚志らは氷見市十二町潟、射水市放生津潟・足洗潟、黒部市生地でボーリング調査を行い、それぞれ約 7,900 年前、約 7,200 年前、約 6,900 年前、約 6,000 年前に潟湖が成立していたとする（卜部他 2017）。射水平野は藤井の想定より早い約 7,200 年前に海岸線に浜堤が成立していたとしている。

３　低地縄文遺跡のありかた

遺跡の立地と地質の見解とをあわせて考えると、浜黒崎町畑遺跡の地山（砂層）から出土した蜆ヶ森Ⅱ式土器は、まさに卜部らの言う海岸線の浜堤がすでに成立していて、そこに立った縄文人が残したものと考えられる。標高の低い集落の小竹貝塚については、浜堤によって眼前に潟湖が広がるものの、地山が砂ではなく、粘土質で軟弱地盤であることから地盤沈下も考えられるかもしれない。

一方、後期である。周辺の遺跡のほかに、魚津市魚津埋没林遺跡からは標高０ｍ以下で後期後葉の土器（打越山他 2002）、さらに黒部市堀切遺跡では標高 2.0 mに後期の竪穴建物が形成されている（八尾他 2007）など、後期の遺跡は富山湾近くにある。なお、魚津埋没林遺跡出土の土器は東北地方に多い瘤付土器で、実は浜黒崎町畑遺跡の試掘調査でも同様な土器が出土している（田中編 2022）。このことからも、海岸線沿いの広域な交流がうかがえる。浜黒崎町畑遺跡と浜黒崎悪地遺跡、その近辺では後期になって遺跡は大きく増加する。このように後期以降は、海岸線近くの低地も安定した土地となり、海退の影響かはともかくとして、集落を形成できるようになったと言えよう。

おわりに

一般に縄文遺跡は台地上にあると思われ、実際、北代遺跡などの大集落は台地上に形成されている。低地への進出は、農耕や水田耕作の可能性から、晩期以降と考えられてきた。ところが、沖積地の調査が進む中で低地からの縄文土器の発見が増加している。これは縄文時代の人々が低地部を利用していたことを示している。それについては以前書いたことがある（町田 2010）。浜黒崎町畑遺跡と浜黒崎悪地遺跡は、古代以降の遺跡として調査を行ってきた。そのなかでの縄文土器の出土である。前期の土器片は、早い時期の砂丘形成を考える貴重なピースとなった。また、後晩期の土器片は、周辺の遺跡と整合性がとれ、後期以降の活発な低地利用を示す。このように、土器の摩滅状態など原位置性は考えなくてはならないが、低地部の遺跡では、一片の縄文土器でも重要な役割をもつのである。

引用・参考文献

青山晃 2024『水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査課
安達志津 2003「水橋二杉遺跡」『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅴ』富山市教育委員会
井伊浩一郎・古川知明 2000『北代西山遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
打越山詩子・麻柄一志・卜部厚志 2022「魚津埋没林出土の縄文土器」『大境』第 41 号　富山考古学会
卜部厚志・酒井英男・麻柄一志 2017「富山湾沿岸地域における潟湖の成立年代」『大境』第 36 号　富山考古学会
岡崎卯一 1966「利波土師遺跡の調査」『放生津潟周辺の地学的研究』第三集　富山地学会　第一港湾局伏木富山港工事事務所
小黒智久編 2009『富山市百塚住吉遺跡　百塚住吉Ｂ遺跡　百塚遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
鹿島昌也 1996『富山市野田・平榎遺跡　野中新長幅遺跡　宮条南遺跡　高島島浦遺跡』富山市教育委員会
鹿島昌也・古川知明 2001『富山市千原崎遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
鹿島昌也編 2008『富山市八町Ⅱ遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
鹿島昌也編 2012『富山市百塚遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
鹿島昌也・久保浩一郎・竹中庸介 2012『富山市百塚住吉Ｄ遺跡発掘調査報告書Ⅱ』富山市教育委員会
鹿島昌也・片山博道 2013『富山市今市遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
川崎一朗 2021『立山の賦』桂書房
久々忠義・岡本淳一郎・古川知明 1987『長岡杉林遺跡』富山市教育委員会
小林高範・堀沢祐一 1994『富山市浜黒崎悪地遺跡発掘調査概要』富山市教育委員会
小林高範・堀沢祐一 1995『富山市浜黒崎悪地遺跡　野中新長幅遺跡　野田・平榎遺跡』富山市教育委員会
小林高範 1997『富山市宮条南遺跡　高島島浦遺跡　針原中町Ⅰ遺跡　針原中町Ⅱ遺跡』富山市教育委員会
小林高範 1998『富山市高島島浦遺跡　針原中町Ⅰ遺跡　針原中町Ⅱ遺跡』富山市教育委員会
小林高範 2000『富山市針原中町Ⅱ遺跡発掘調査概要』富山市教育委員会
小林高範 2016『富山市内遺跡発掘調査概要ⅩⅦ』富山市教育委員会
泉田侑希 2020『富山市内遺跡発掘調査概要　22』富山市教育委員会
田中道子編 2018『平榎亀田遺跡　浜黒崎野田・平榎遺跡　横越水窪遺跡　横越遺跡発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
田中道子編 2022『県営農地整備事業浜黒崎地区埋蔵文化財試掘調査報告』富山県埋蔵文化財センター
常深尚編 2021『富山市横越遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
富山大学考古学同好会編 1954『蜆が森貝塚調査報告書』富山県教育委員会
野垣好史 2005「縄文人の低地への進出　水橋荒町・辻ヶ堂遺跡」『富山市の遺跡物語』第６号　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
野垣好史 2014「北代村巻Ⅴ遺跡」『富山市内遺跡発掘調査概要　XI』富山市教育委員会
藤井昭二 1964「地質からみた射水平野の形成と放生津潟の変遷」『放生津潟周辺の地学的研究』 富山地学会　第一港湾局伏木富山港工事事務所
藤田富士夫 1974『富山市豊田遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
藤田富士夫 1978『富山市呉羽富田町遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
藤田富士夫・鹿島昌也・安達志津・稲垣裕二 2003『富山市長岡八町遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
古川知明 1989『昭和 63 年度　富山市埋蔵文化財発掘調査概要』富山市教育委員会
古川知明 1999『富山市千原崎遺跡発掘調査概要』富山市教育委員会
古川知明編 1999『史跡北代遺跡ふるさと歴史の広場　整備事業報告書』富山市教育委員会
古川知明・桐谷優・折原洋一 2000『富山市四方荒屋遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
古川知明・高野裕二 2001『茶屋町西山遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
古川知明編 2002『富山市岩瀬天神遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
古川知明・新宅輝久・藤田慎一 2004『富山市打出遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
古川知明 2004『富山市北代加茂下Ⅲ遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
細辻嘉門・久保浩一郎 2007『富山市内遺跡発掘調査概要　Ⅱ』富山市教育委員会
細辻嘉門・伊藤雅和・今井千尋 2019『富山市米田南田遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
細辻真澄 2007『北陸新幹線関係　埋蔵文化財包蔵地調査報告（７）』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
堀内大介・朝田要 2013『富山市豊田大塚・中吉原遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
堀沢祐一・鹿島昌也 1997『富山市内発掘調査概要　Ⅰ』富山市教育委員会
堀沢祐一・瀬戸かな子 2003『富山市北代西山Ⅱ遺跡　茶屋町遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
町田賢一 2010「富山県における縄文遺跡のあり方」『紀要　富山考古学研究』第 13 号　財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
町田賢一編 2014『小竹貝塚発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
町田賢一 2024『浜黒崎町畑遺跡　浜黒崎悪地遺跡発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査課
八尾隆夫・小川幹太・莵原雄大 2007『堀切遺跡Ｇ区発掘調査報告書』黒部市教育委員会

２　『水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告』補遺

青山　晃

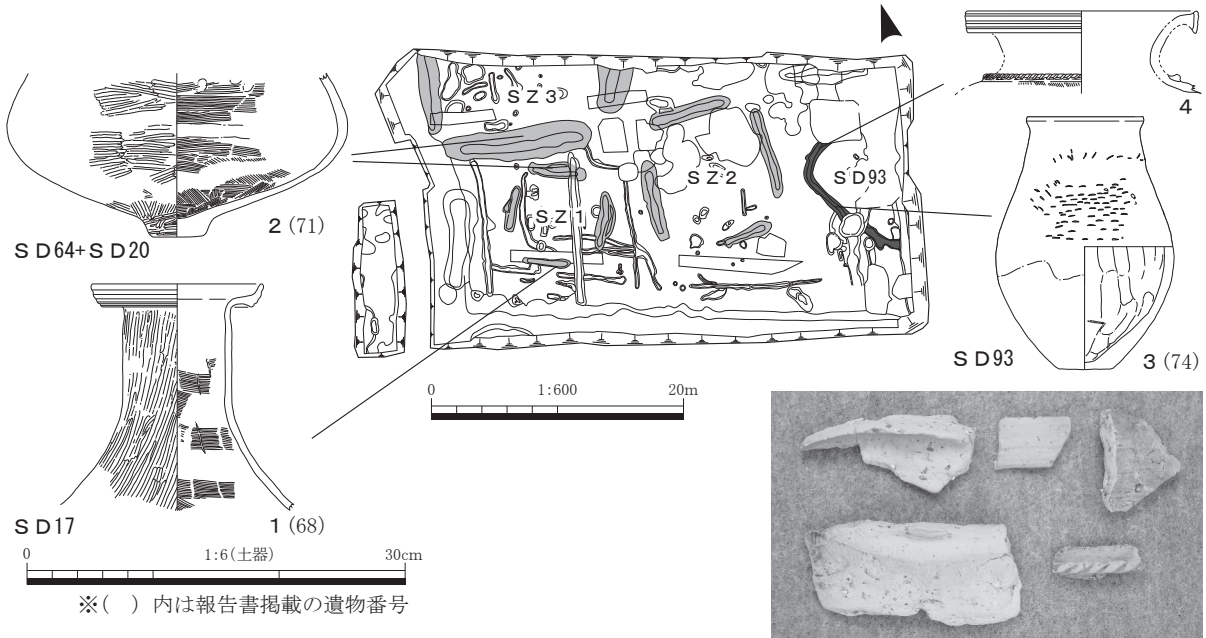
はじめに

令和４・５年度に水橋荒町・辻ヶ堂遺跡において実施した調査では主に弥生時代、中近世の遺構や遺物を確認した。その調査結果は令和６年３月に『水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告』（公益財団法人富山県文化振興財団 2024）として刊行した。しかしながら、報告者である筆者の力不足により記載が及ばなかった点がある。本来ならば校正中に追記すべきであったが、紙幅や時間的制約のため叶わなかった。そのため、報告書の補足として記しておくこととする。

１．ＳＺ１・３の出土土器について

調査では弥生時代後期後半（法仏式期）の方形周溝墓３基の他、同時期と考えられる溝・土坑を検出した（第１図）。そのうち、ＳＺ１の周溝ＳＤ 17 からは口縁部から頸部が残る壺（１）、ＳＺ３の周溝ＳＤ 64 からは下膨れの胴部となる壺（２）が出土した。後者は底部がＳＤ 64、胴部はＳＺ１の周溝ＳＤ 20 との接合資料である。この両者は色調に多少の違いがあるが、内面のハケメによる調整痕は近似しており、推定される全体の器形を加味すると同一の個体となる可能性がある。また、ＳＤ 64 では底部の破片のみが出土したことから、ＳＺ１での供献土器であったものが破損して、一部がＳＤ 64 に流入した可能性が高いと考えられる。この下膨れ形態の壺について、同様な時期の類例（第２図）として西念・南新保遺跡（３）、伊勢遺跡（８）を示していた。ここでは福井県内での事例を追加しておきたい。

林・藤島遺跡泉田地区では有段状の口縁部で長い頸部から肩部（４）と下膨れの胴部（５）の２点がある。共に波状文、凹線文、突帯で加飾され、前者には口縁部に円形浮文を貼り付ける。４は法仏Ⅱ式の土坑ＳＫ 5282、５は古墳時代初頭の川１からの出土である。志田神田遺跡では体部が扁球状となる壺の中に大型品（６・７）の２点がある。鹿谷川旧流路の下層からの出土で、弥生時代後期後葉～末の所産とされる。他に西念・南新保遺跡にて類似資料とされた山ヶ鼻４号墓出土土器（９・10）



第１図　水橋荒町・辻ヶ堂遺跡Ａ地区土器出土位置

写真　土器４の破片

も示しておく。櫛描文や赤彩による加飾があり、東海地方西部の山中式（11）の影響を受けたとされるが、口縁部形態は有段状となり、在地的な要素も認められる。山ヶ鼻４号墓は弥生時代後期後葉に位置付けられている（御嶽 2011）。こうした東海系の影響が先に見た４・５にも及んだ可能性がある。

また、類例として示した伊勢遺跡（８）は、その出土遺構である五角形住居ＳＨ－１の出土土器群が近江地域南部の野洲川流域における編年でのⅤ－中段階とされ、この段階では壺類には「在地土器と同じく櫛描文を加えたりするものも見られる」（伴野 2000）ことから、８での加飾は在地的な要素と考えておく。一方、器形については同地域でも通有ではなく、その成因ははっきりしない。

これらを水橋荒町・辻ヶ堂遺跡（１・２）と比べると、胴部から頸部にかけてなだらかに立ち上がる形態は４～８と共通する。特に頸部が筒状に立ち上がる部分は４・８と類似するが、加飾の点は一致しない。又、胴部から頸部にかけての形態については北近畿地方からのフラスコ状台付壺（12）や脚台を持たないフラスコ状の壺（13）とも似通っており、その関係性も想定される。

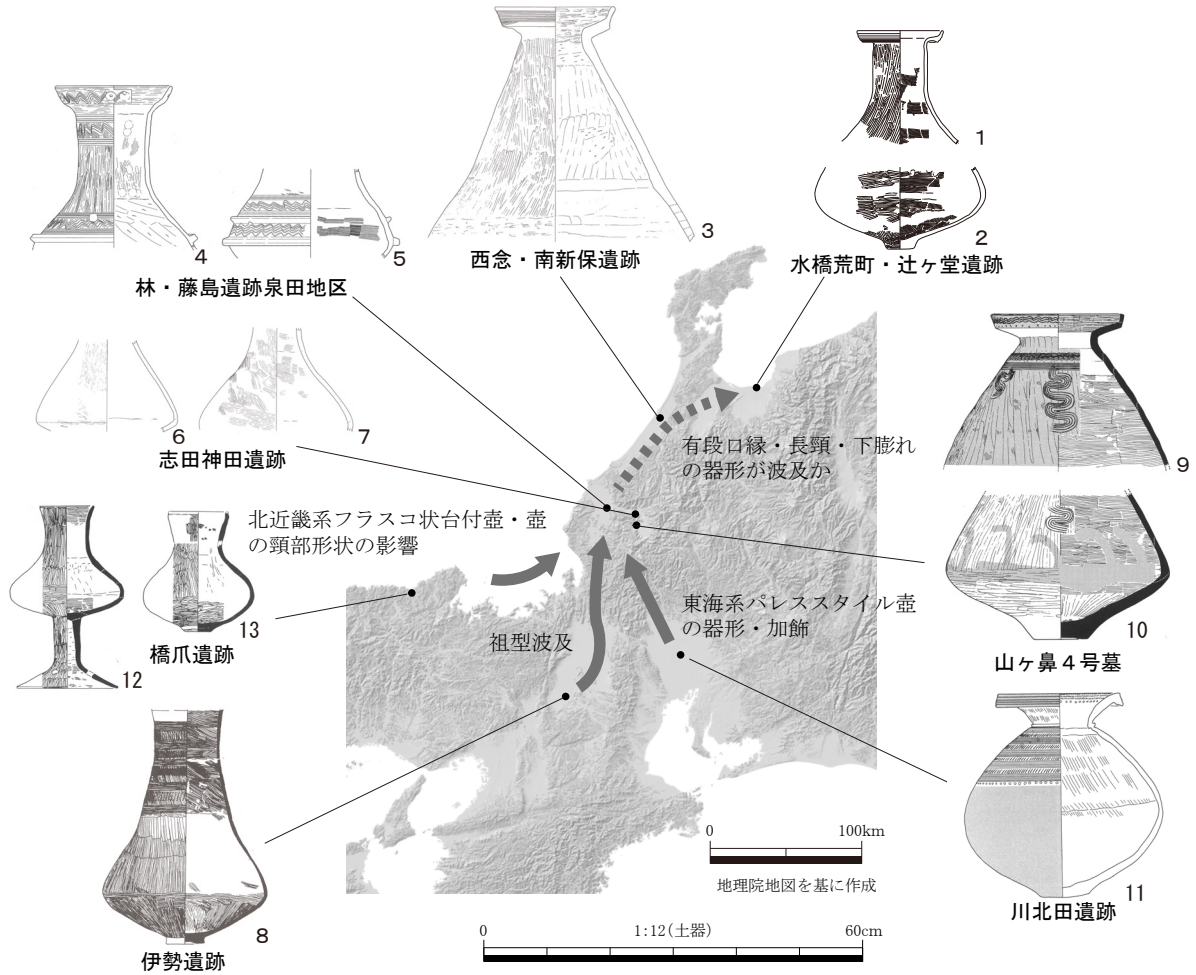
時期的には１～７については法仏式期の所産であるが、近江地域の８、北近畿地域の 12・13[注1]は土器編年の広域的併行関係（赤塚 2002）によれば、１～７よりも先行する弥生時代後期中葉となる。こうした様相からは８が古く、その後に北陸南西部へ波及したと考えることも可能であろう[注2]。そこでは東海系の加飾も加わり４・５が成立し、頸部が８よりも引き締まった形状には北近畿系の要素が影響したかもしれない。これにより有段口縁で長頸の下膨れ形態となる壺が成立し、６・７→３→１・２のように加飾性が廃されながら北陸北東部へ波及していった可能性がある。ただし、１～７はいずれも法仏式期の段階ではあるが、詳細な時期を判断しがたいものもあることから、時間的な前後関係を精緻に把握できた訳ではない。このように有段口縁・長頸・下膨れの壺の存在や広がりを確認することは出来たが、その事例はまだ少なく、その成立や拡散の様相については今後の類例拡充を待ってあらためて検討すべき課題としたい。

２．ＳＤ 93 出土土器について

ＳＤ 93 は方形周溝墓の可能性もある溝で、出土土器として爪状圧痕を施した短頸壺（第１図―３）を提示していた。それ以外には溝の北側で壺の破片が少量あったのみである。その破片資料を再検討したところ、図上の復元であるが、広口壺（第１図―４）を確認した。３とは出土位置も異なるが、ＳＤ 93 の時期を考える上での追加資料として示しておく。

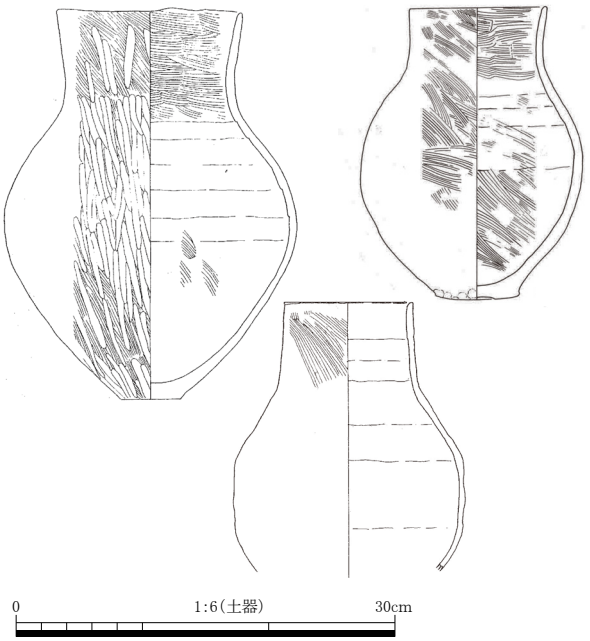
４は短い頸部から外反して口縁部が立ち上がり、口縁端部は上下に拡張して面を設ける。その口縁端面には擬凹線を施す。頸部付け根には突帯を貼り付け、斜めの刻文を施す。突帯から口縁部にかけては赤彩されている。こうした広口壺は江上Ａ遺跡における後期Ⅱ期及びそれに先行する後期Ⅰ期に存在する。この内、後期Ⅰ期については江上Ａ遺跡では該当する時期の資料が少ない。そこで、後期前半の土器についての高橋浩二氏の検討（高橋 2000）を参考とすれば、後期前半の新相（高橋氏の後期Ⅱ期）となり、江上Ａ遺跡後期Ⅰ期の後半に相当する。これに基づけば、ＳＤ 93 の時期は後期Ⅰ期後半から後期Ⅱ期にかけてとなり、方形周溝墓出土の土器が後期Ⅱ・Ⅲ期主体であるのに対して、少し先行する段階も含まれる。ＳＤ 93 が方形周溝墓であった場合、四隅切れでない形態で主軸方向の異なるものが先んじて構築されたこととなろう。

また、３の器形は江上Ａ遺跡での壺形土器との比較の中で検討しており、ここでは江上Ａ遺跡（上市町教育委員会 1982）での様相を示しておきたい。３のように頸部と胴部との境界が不明瞭な壺は江上Ａ遺跡での分類における壺Ｇ類の内、Ｇ１類に類似する（第３図）。壺Ｇ類は「球形あるいは卵形の

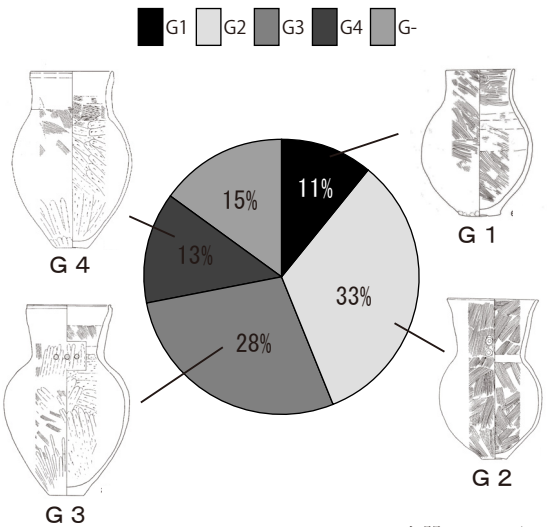


１：水橋荒町・辻ヶ堂遺跡ＳＺ１−ＳＤ18、２：水橋荒町・辻ヶ堂遺跡ＳＺ３−ＳＤ64（公益財団法人富山県文化振興財団 2024）
３：西念・南新保遺跡Ｈ地区ＳＤ01 下層（金沢市教育委員会 1989）
４：林・藤島遺跡泉田地区ＳＫ5282、５：林・藤島遺跡泉田地区川１（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009）
６・７：志田神田遺跡鹿谷川旧流路（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009）
８：伊勢遺跡第４次調査ＳＨ−１（守山市教育委員会 1983）、９・10：山ケ鼻４号墓（大野市教育委員会 1980）
11：川北田遺跡（愛知県 2003）、12・13：橋爪遺跡（財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989）

第２図　下膨れ形態の壺の諸例と関連遺物の分布



第３図　江上Ａ遺跡での壺Ｇ１類



土器：Ｓ＝1/12

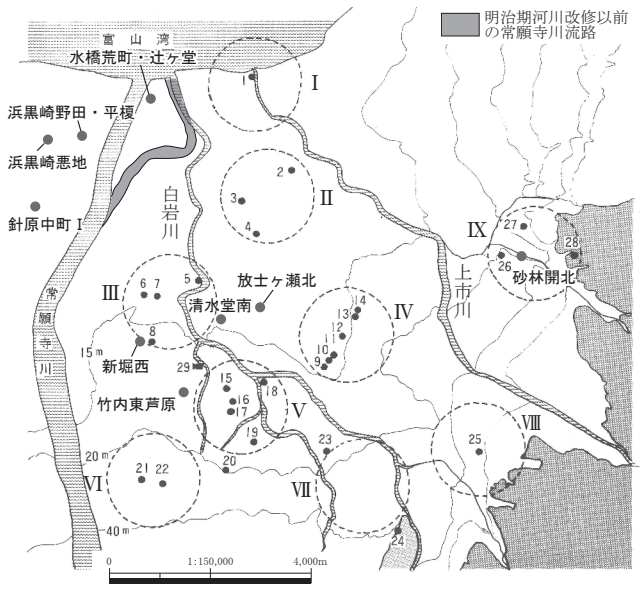
第４図　江上Ａ遺跡での壺Ｇ類構成比率

胴部に、円筒状の口頸部がつく長頸壺」とされる。この内、Ｇ１類は「頸部がやや短く、胴部と頸部境がなだらかな」形態となる。この他に、Ｇ２類が「長い頸部が胴部との境でくの字に屈曲するもので、口縁部が角ばる」、Ｇ３類が「外反する頸部が口縁部でやや内傾する」、Ｇ４類が「口縁部が丸みのある」形態に分類されている。これら壺Ｇ類は江上Ａ遺跡の報告書には 46 点掲載され、Ｇ１類は５点（11%）、Ｇ２類は 15 点（33%）、Ｇ３類は 13 点（28%）、Ｇ４類は６点（13%）、細分できないＧ類は７点（15%）の構成比となる（第４図）。これは複数の遺構をまとめた、多少時期幅のある土器群での比率となるが、Ｇ１類が一定量存在することとなる。こうした頸部の括れが弱く、なで肩状あるいは肩部分が不明瞭な壺があることから、その系統の中で３を位置付けた。しかしながら、３の形状は壺Ｇ１類と比較しても、さらに頸部と胴部の境界は不明瞭な形状をしている。３の外面はハケの後にナデを施し平滑に仕上げ、それは爪状圧痕による施文を際立たせる工夫であったのだろう。こうした施文を前提として製作された土器であったため、施文範囲の確保といった要因も加わり、Ｇ１類に似つつも独特な形状となったと考えられる。

おわりに

出土土器の補足により、ＳＤ 93 の時期は方形周溝墓よりも先行し、後期前半（猫橋式期）の終わり、もしくは後期後半の早い段階となる可能性を示した。その後、方形周溝墓ＳＺ１～３が形成される変遷が想定される。なお、ＳＺ３周溝の埋土について花粉分析を実施した結果[注3]、埋没し始めた段階では周辺の開発は進んでおらず、その後に開墾が進んでいたことが判明している。つまり、人々の居住や生産活動が及んでいなかった場所に突如として墓域が形成されたこととなる。

このように弥生時代後期には墓域からは距離を置いた場所で居住を開始した集団があり、ほどなくして方形周溝墓形成の契機となる人物の死を迎えた。ＳＺ３が県内でも大型の方形周溝墓であることから、それなりの集団規模、生産能力をすでに有していたと考えられよう。また、有段口縁・長頸・下膨れの壺が北陸南西部で成立し、それが波及してきたと考えるならば、遠隔地との交流ネットワー



※図・表ともに白岩川・上市川流域の弥生遺跡群（久々1984）を基に近年の調査成果等を追加した。なお、遺跡番号１～29については、現在では遺跡名等が変わっているものもあるが、そのままとしている。

第５図　遺跡周辺の弥生時代の遺跡分布

ブロック	番号	遺跡名	中期	後期	末期	備考
Ⅰ	1	魚躬	○	○	○	
Ⅱ	2	小池			○	
	3	小出Ⅱ	○	○	○	
	4	小出				
Ⅲ	5	水橋金尾	○	○	○	
	6	中野	○	○	○	
	7	金尾新				
	8	新堀		○	○	
Ⅳ	9	正院新	○	○		集落
	10	下経田			○	
	11	中小泉	○	○		
	12	飯坂	○	○		墓域
	13	江上A	○	○		集落
	14	江上B	○	○	○	集落
Ⅴ	15	小平				墓地
	16	浦田露気		○	○	
	17	浦田西反			○	
	18	泉下役		○	○	
	19	稚子塚		○		
	20	二ッ塚	○			
Ⅵ	21	利田仕入	○	○		
	22	五郎丸	○			
Ⅶ	23	辻西吉原田		○		
	24	日中源兵衛腰		○	○	
Ⅷ	25	湯上子				
Ⅸ	26	本江広野新		○	○	集落
	27	下石山		○		
	28	本江扇平		○		
	29	竹内天神堂古墳				前方後方墳
近年の発掘調査成果により追加した遺跡		水橋荒町・辻ヶ堂		○		墓域・集落
		浜黒崎野田・平榎	○	○	○	集落
		浜黒崎悪地	○	○	○	集落
		針原中町Ⅰ	○			集落
		新堀西		○	○	集落
		清水堂南		○	○	墓域
		放士ヶ瀬北	○			墓域？
		竹内東芦原	○	○	○	集落
		砂林開北			○	集落

クの中で様々な事象に鋭敏に反応した人々であったのだろう。加えて、類例の極めて少ない爪状圧痕を施す土器を作り上げるような人物が存在し、そこに込められた概念を共有していた集団であった。なお、水橋荒町・辻ヶ堂遺跡での既往の調査では、今回の調査地点から南へ約 800 mの付近で旧河道沿いの微高地上には後期～終末期の集落の存在が確認されている（富山市教育委員会 2002）。集落の全体像は明らかでないが、墓域形成に関わった集団の居住地についての有力な候補地となろう。

さて､弥生時代における白岩川流域及び上市川流域での遺跡分布の検討(久々 1984)では９つのブロックが示されている（第５図)。そこでは水橋荒町・辻ヶ堂遺跡の位置する白岩川下流域の左岸側は空白地域であった。そうした中、水橋荒町・辻ヶ堂遺跡では墓域が確認され、やや距離をおいて集落も形成されていた可能性が高い。また、常願寺川の左岸側においても浜黒崎悪地遺跡や浜黒崎野田・平榎遺跡などで弥生時代中期以降の活動が近年の調査により確認されている。こうした白岩川・常願寺川左岸側の下流域や海浜部を領域として展開した遺跡群の動態の中で墓域が形成されたのであろう。今後、調査の進展により集落の様相や他地域との交流などの解明がさらに進むことが期待される。

注

（１）12・13 についは石井清司氏（石井 1989）による編年での位置付けを基に、丹後地域の編年観（野島・野々口 1999・2000）に当てはめ後期Ⅱ期新相とした。髙野陽子氏により再整理された編年（髙野 2006）では大山３式新段階に相当する。

（２）伊勢遺跡の位置する近江の湖南地域は五角形住居や周溝をもつ竪穴住居の存在から北陸地域との交流があったことが示され､近江型土器の北陸地域への波及から日本海沿岸との交流は一方的なものではなかったとされている（伴野 2009)。こうした状況から湖南地域との交流の中で波及した可能性を考えた。

（３）報告書（公益財団法人富山県文化振興財団 2024）における「第Ⅳ章 自然科学分析　２ 令和４年度水橋荒町･辻ヶ堂遺跡自然科学分析」を参照されたい。

引用・参考文献

愛知県 2003『愛知県史　資料編２　考古２　弥生』

赤塚次郎 2002「総説 土器様式の偏差と古墳文化」『考古資料大観２　弥生・古墳時代　土器Ⅱ』小学館

大野市教育委員会 1980『山ケ鼻古墳群』

上市町教育委員会 1982『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町土器・石器編―』

上市町教育委員会 1998『富山県上市町 砂林開北遺跡発掘調査概報』

上市町教育委員会 1999『富山県上市町 放士ヶ瀬北遺跡発掘調査概報』

金沢市教育委員会 1989『金沢市 西念・南新保遺跡Ⅱ』

久々忠義 1984「Ⅱ総括 B弥生時代の時期区分 C江上弥生遺跡群について」『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町木製品・総括編―』上市町教育委員会

公益財団法人富山県文化振興財団 2024『水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告』

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989『京都府弥生土器集成』

高橋浩二 2000「古墳出現期における越中の土器様相―弥生時代後期から古墳時代前期前半土器の編年的位置付け―」『庄内土器研究 22』庄内土器研究会

高野陽子 2006「丹後地域―擬凹線文系土器の様式と変遷―」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター

富山市教育委員会 1994『富山市 浜黒崎悪地遺跡発掘調査概要』

富山市教育委員会 1995『富山市 浜黒崎悪地遺跡　野中新長幅遺跡　野田・平榎遺跡』

富山市教育委員会 1996『富山市 野田・平榎遺跡　野中新長幅遺跡　宮条南遺跡　高島島浦遺跡』

富山市教育委員会 1998『富山市 高島島浦遺跡　針原中町Ⅰ遺跡　針原中町Ⅱ遺跡』

富山市教育委員会 2000『富山市 水橋 清水堂南遺跡』

富山市教育委員会 2002『富山市 水橋荒町・辻ヶ堂遺跡掘調査報告書』

野島永･野々口陽子 1999･2000「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(１)･(２)」『京都府埋蔵文化財情報 第 74･76 号』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

伴野幸一 2000「湖南地方における弥生集落の動向―野洲川流域の弥生時代中期後半から後期の集落をめぐって―」『みずほ第 33 号』大和弥生文化の会

伴野幸一 2009「第９章 伊勢遺跡の歴史的位置」『伊勢遺跡確認調査報告書Ⅶ』守山市教育委員会

福井県福井県庁埋蔵文化財調査センター 2009『志田神田遺跡』

福井県福井県庁埋蔵文化財調査センター 2009『林・藤島遺跡泉田地区』

舟橋村教育委員会 2002『富山県舟橋村 竹内東芦原遺跡発掘調査報告』

舟橋村教育委員会 2018『富山県舟橋村 竹内東芦原遺跡発掘調査報告』

御嶽貞義 2011「コシの弥生墓制」『考古学フォーラム記録集 日本海側の弥生墓制』鯖江市教育委員会

守山市教育委員会 1983『守山市文化財調査報告書 第 12 冊』

令和５年度

埋蔵文化財年報

令和６年５月 31 日発行

編集・発行　公益財団法人富山県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 課
〒 930-0887　富山市五福 4384 番１号
TEL（076）442-4229
FAX（076）433-3797
印　　刷　株式会社 北陸製版センター